

違ない。

②4 körgü は kör + gü で、動詞「見る」を言ひ据ゑた名詞に違ないが、もし此の識語だけについてかく「körgü に成れと言ひて」の意ならば、見る物とは、鑑とか證據とか譯すべきであらう。

②5 cisin- はラドロフに據れば、herausbringen, leeren, (Osm.); sich entkleiden (Kas.); sich ausziehen (kar. T.)等の義であるから、こゝには拔萃の譯を施したが、他に適當の譯があるかも知れない。tu xiä は何と譯すべきか、tu は tamür につくべきかとも思ふが、他の所には皆チュケル・テミユルと記されて居るから、チュケル・テミユルトと讀むべきではあるまい。xiä は屢々遭遇する語で、其の前に来る語の副詞語尾とも見られ、また「たゞ」、「のみ」の義に用ゐられ、本書に於ては常に「小」の譯語として用ゐられて居る。こゝの解釋の仕方によつてその意義を定めらるべきである。

②6 küjn は思ふに卷 chüan. \* kĩaän の音を寫して稍々變化したものであらう。次の譯例の III 13 行に küjn と記されて居るのも、之と同語で無ければならぬ。

②7 idi は Thomsen, Radloff, Bang 等の共に souverain, Herr 等即ち君主の義に解せる語である。併し此の書に於ては、たゞ此處だけでは無く、例へば第一卷四十七枚裏第五行目には、神通の「神」を idi と譯し、同四十八枚第十行目には、此處に於ると同じく威神の「神」を idi と譯してあるから、これに「神」即ち靈妙の力といふやうな意味の存することは争はれない。

Herr, souverain の義は恐らく第二義として起つて來たものであらう。idug を神聖 (heilig) と解し、idug qut > idiqut (亦都護) = die heilige Majestät と解することは、今日よく知られて居ることであるが (Müller, Uigurica, 56) 自分は此の idug も恐らく idi に發した語であると考へる。

②8 küg (kög?) は漢文を對照すれば泥の義に譯すべきであるが、今此の語に此の義の存するのを知らない。尙本書では「生死泥」といふ語は常に此の形を以て譯されて居ること、例へば第一卷四十六裏面第三行に於ても認められる。